

「日本文化論」からの脱却 ―マスメディア分析を通して―
慶應義塾大学法学部政治学科 4年O組 30762735 宮本翔太

目次

- 第1章 はじめに
- 第2章 「日本文化論」が孕む問題点
- 第3章 「日本文化論」という概念自体の問題
- 第4章 「日本文化論」の社会的構築
- 第5章 マスメディアの「日本文化論」構築―出版物、新聞―
- 第6章 マスメディアの「日本文化論」構築―テレビ―
- 第7章 マスメディアの「日本文化論」脱構築
- 第8章 結論

第1章 はじめに

生活の中にはさまざまな枠組みがある。それらの枠組みは、人やモノ、現象などの一般化によって生じる。この一般化によって物事を理解しやすくなり、生活における利便性が獲得される。しかし、そうした一般化はそれによって捉えきれない事象を直ちに排除することになる。これを他者化と呼ぶとすれば、一般化と他者化はほぼ同時に起こると言えよう。この一般化と他者化の一つが本卒論で取り上げる「日本文化論」だ。

「日本文化論」を取り上げるのは、日本人や日本文化なるものを自分なりに分析し、一般化し、新たな「日本文化論」を構築してしまうためではない。むしろその逆で、「日本文化論」から脱却すること、さらにはそこから文化本質主義を揺るがせることが「日本文化論」を取り上げる目的だ。

自分自身「日本文化論」について学校で教育を受けたり、身近な人から言い聞かされたりした記憶はほとんどない。しかし、「日本文化論」なるものが自らの内面にあることは間違いなかった。集団を重んじるだとか、細かい気配りがあるだとか、勤勉だとか、そうした「日本文化論」が無意識的に構築されていた。そこで、では一体どのようにして「日本文化論」が構築されたのかという疑問が生じた。この根本的な疑問を解決するための分析は第5章以降でマスメディアを舞台に行うが、その分析過程で気づいたことがある。それはマスメディアが伝える事例において、「日本文化論」を補強する事例がある反面、「日本文化論」に挑戦する事例も十分にあるということだ。

しかし、その「日本文化論」に挑戦する事例が、「日本文化論」を脱構築するために必ずしも有効に機能しているとは言えない。その事例が新たな「日本文化論」を生み出したり、例外として素通りされたりする可能性があるからだ。この挑戦的な事例に直面してすら、強固に居座り続ける「日本文化論」の背後には、文化本質主義がある。文化本質主義とは、日本人や日本文化の間に普遍的な特徴があり、それは他国の人や他文化が持つ特徴とは本質的に異なるものだとする考え方である。「日本文化論」は日本人や日本文化のユニークさを強引に際立たせ、この文化本質主義に大いに加担するのである。逆に言えば、文化本質主義と強く結びつく「日本文化論」を崩壊させることで、文化本質主義を揺るがせることもできよう。この文化本質主義からの脱却は重要である。確かに、今の時代、声高に本質主義的なものの言い方をする人は少ない。異文化理解や多文化共生社会といった言葉が浸透し、経済界でも異文化経営や異文化シナジーといった言葉が登場している【日本経団連2004】。このように、文化相対主義的な価値観が社会に広まっているようにも見えるが、現状では静的文化モデルに基づく文化相対主義であることが多く、それは文化本質主義とほとんど変わらない【馬淵 2010 : 175】。実際、外国人への偏見や差別、地方参政権の問題など、課題は多く、多文化共生が達成されているとは決して言えない。多文化共生の実現のためにも根本的な問題である文化本質主義からの脱却を模索する必要がある。本卒論の最終的な目標もここだ。

以上の点を踏まえて、次章でまず「日本文化論」がいくつかの問題点を内包していることを指摘し、第3章で「日本文化論」という概念を形成してきた代表的な著作を見ていく。そうして「日本文化論」という概念そのものに問題があることを確認し、第4章では「日本文化論」が日本社会に構築されてしまう原因について、通説を紹介した後で、「文化仲介者」という役割に注目しながら考察する。第5章からは「文化仲介者」的役割を果たすものとしてマスメディアに焦点を当て、分析を行っていく。分析は出版物や新聞、テレビを対象とし、それらの分析結果を踏まえた上で最後に「日本文化論」脱構築の糸口を探りたい。

第2章 「日本文化論」が孕む問題点

かつて小熊英二は、日本が単一民族国家であるという言説が神話であることを証明したが [小熊 1995]、現在、それが日本人の人種や血統という想像上の概念を完全に突き崩すまでには至っていない。単一民族言説が弱まったとしても、日本は「日本人」を中心とする同質的社会であるはずだという「日本人性」の幻想が強固に存在しているからだ。この「日本人性」の幻想は、現代のグローバル化とともに消滅するどころか、逆に存在感を増している。在日外国人の増加など急激な社会変動によって、日本社会での「日本人性」が揺らいでおり、そのことから生じる不安が逆に「日本人性」の幻想をより強固にする。つまり、「日本人性」が揺らいでも、「日本人」はそれを本来あるべきものと思い込み、必死にその幻想にしがみついたのである。非正規滞在外国人への強い風当たりや外国人移民論争は、そのような「日本人」の姿勢が現れたものと言えよう [塩原 2010 : 162—165]。この「日本人性」の幻想を存続させるためには、「日本人」の同質性と特異性を同時に保証するものが必要となる。同質的な「日本人」が存在し、それが他者とは異なる独自の存在であることをいつでも確認できなければならないからだ。そしてこの同質性と特異性を同時に訴えることができるものこそ「日本文化論」である。「日本文化論」は「日本人」や「日本文化」を一枚岩と捉えることでその同質性を論じ、また、他者や他文化との限定的な比較によって容易にその特異性を際立たせる。それはまさに「日本人性」の幻想崩壊を救う救世主のようなものなのである。

このように強固な「日本人性」の幻想と結びついた「日本文化論」は、歪んだ方法によって成立している。「日本人」に普遍的な「日本文化論」が存在するという信念があまりにも強くなり、そのため一つ一つの事例に対して客観性を欠き、「日本文化論」成立のために都合の良い解釈をしてしまう。これによって、「日本文化論」においては、限定的なエピソードに基づく極めて強引な一般化が行われるのである [馬淵 2010 : 101—114]。このエピソードに基づく一般化は、あらかじめ想定された「日本文化論」を指針として行われる。既存の「日本文化論」や直感的に想定された「日本文化論」を先に設定し、それに沿うようなエピソードばかりが集められるのである。また、想定された「日本文化論」と矛盾する

ようなエピソードに対しては、どうにかして想定された「日本文化論」に組み込もうとし、それができないようであれば例外として排除してしまうのである。

このように、「日本文化論」は「日本人性」という強固な幻想と結びついており、そのために強引なエピソード主義を可能にするという問題点を孕んでいる。確かに、エピソードに基づく一般化自体は、何かを語る上では避けられないことかもしれない。だが、そのエピソードに基づく一般化があまりにも強引であれば、違和感や疑問が生じてその一般化は弱まるはずだ。しかし、「日本文化論」という一般化の場合、「日本人性」という強固な幻想に囚われており、本来生じるはずの違和感や疑問が生まれにくくなっているのである。その点が「日本文化論」の顕著な特徴であり、同時に大きな問題点であると言えよう。そしてこの「日本人性」の幻想は、「日本人」に文化本質主義的なまなざしを持たせる。同質的かつ他と比して特異な「日本人」が存在すると信じ込むことで、日本文化／非日本文化、あるいは日本人／非日本人という二分法で物事を捉えてしまい、また、それを揺るぎないものであると考えてしまう。この文化本質主義的なまなざしは、文化の違いでは語りきれない個人の多様性を隠蔽してしまう。例えば日系ブラジル人の子どもの場合、日本への滞在期間や来日時期、日本語能力やポルトガル語能力、家族構成や保護者の階層、それに生い立ちや帰国予定の有無など、文化の違いでは語りきれない多様性がある。文化本質主義的なまなざしではこのような多様性に気づくことが難しく、個々の多様性を文化の違いへと還元してしまうのである。また、文化本質主義的なまなざしは、規範として存在する日本文化のルールに意識的になることを妨げる。「日本文化」を不変的な揺るぎないものとして捉えるために、日本の文化的なルールが日本社会の大前提となる。そのため、規範としての日本文化のルールが、異なる文化に慣れ親しんできた人々にとっては大きな弊害となっていることに気づくことができない。そして、本当は規範としての日本文化のルールに戸惑っているのに、それを個人の問題として片付けてしまうということが起こるのである【松尾 2010: 199—200】。さらには、このような文化本質主義的なまなざしによる弊害が、日本人／非日本人にもとづく不平等な社会構造を生むと同時に、そこから生じる経験や処遇の違いが言説となり、そのような社会構造を再構築していくのである【松尾 2010: 195—197】。このように、「日本文化論」が加担する「日本人性」という幻想は文化本質主義的なまなざしを強化し、それによって日本社会には大きな弊害が生じているのである。

以上、「日本文化論」が孕む問題点をみてきたが、そのような問題点は、実は知識人による「日本文化論」生産の時点から観察できる。「日本文化論」によって「日本人」や「日本文化」の同質性や特異性ばかりが強調され、また、それが強引なエピソード主義によって語られる。このような問題点は近年に始まったものではなく、「日本文化論」という概念が一般的に定着した時からすでに内包されていたのである。この点について次章で論じていきたい。

第3章 「日本文化論」を生産した主な著作

「日本文化論」という概念を日本社会に定着させたのは、ルース・ベネディクトの『菊と刀』である。ベネディクトは『菊と刀』において、「日本人は」「日本社会は」といった記述の方法によって日本社会「全体」を示そうとし、そして、その試みが「日本文化論」として一般的に定着することとなった〔青木 1990 : 42—43〕。この「日本文化論」という概念を生むこととなった『菊と刀』は、1946年に原著が出版され、48年に邦訳されており、今から60年以上も前のものである。しかし、だからといって『菊と刀』は現代の「日本文化論」が孕む問題点と無関係というわけではない。むしろ同質性や特異性ばかりの強調、強引なエピソード主義、そして背後にある「日本人性」の幻想といった問題点が、この『菊と刀』にも影を落としている。この点を踏まえ、以下ではこの『菊と刀』によって論じられた「日本文化論」が、現在と共通する問題点を孕んでいることを、「集団主義」と「恥の文化」という二つのテーマに分けて分析していく。

1. 『菊と刀』①—「集団主義」〔ベネディクト 1997〕

ベネディクトは階層制度が日本社会に強い影響を与えていると論じた。その分析は江戸時代の封建制度にまでさかのぼり、明治維新によっても崩れることのなかった階層制度にベネディクトは注目した。そしてベネディクトはこの階層制度が単なる支配—服従関係に留まらず、ある重要な意識を「日本人」に植え付けていると論じる。それは「ふさわしい位置」という意識である。ベネディクトは次のように論じる。

このように日本人はたえず階層制度を顧慮しながら、その世界を秩序づけてゆくのである。(省略)それぞれの領域が周到に階層に分けられていて、上の者も、下の者も、自分たちの特権の範囲を超えると必ず罰せられる。「ふさわしい位置」が保たれている限り日本人は不服を言わずにやってゆく〔ベネディクト 1997 : 110〕。

すなわち、「日本人」は「ふさわしい位置」が定まっていれば安心を感じるのだという。それは自分の「ふさわしい位置」が高い階層であるか低い階層であるかは問題ではなく、その「ふさわしい位置」それ自体に価値が見出される。それは他人においても同じで、「ふさわしい位置」からの逸脱は称賛されないという。この「ふさわしい位置」という考え方は、それぞれの階層における集団意識につながり、「集団主義」という特徴にもつながる。自らの「ふさわしい位置」、すなわち自らが属すべき集団を重んじるという一つの考え方に着目し、ベネディクトは「集団主義」という「日本文化論」を唱えたのである。

2. 『菊と刀』②—「恥の文化」

ベネディクトは「日本社会」では「恩」は債務であるという。恩を受けた場合、必ずその恩に報いなければならないからだ。そして、恩に報いることを「義務」と「義理」との二種類に分類して考えた。両親や天皇に対する恩返しは「義務」であり、それは無限の返済で「受けた恩の万分の一も返せない」【ベネディクト 1997: 135】。それに対して「義理」であるが、ベネディクトは「義理ほどつらいものはない」【ベネディクト 1997: 155】という。「義理」は「義務」とは違い、生まれつきのものではないとし、本来予期していない恩に対する報いのことをいい、それは「不本意」なものだということだ。さらに、この「義理」を怠ると、世間から非難の目を浴びせられることになるという。ベネディクトは、どんな犠牲を払ってでも「義理を知らない人間」という世間からの非難を避けなければならないと「日本人」は考えるとした。そして、このような世間の目を気にする考え方の背景には、「日本文化」が恥を基調とする文化であるという要因があるのだという。ベネディクトによると、文化の型は「恥の文化」と「罪の文化」に区別され、「日本文化」は前者に該当する。「日本文化」においては、小さいころからの物事の判断基準が、その言動それ自体の正誤ではなく、その言動に対する世間の目となるのだ。そのため、日本人は内面的強制力よりも外面的強制力によって社会意識を身につけていき、したがって、そういった社会意識の集合体である「日本文化論」は全体として世間の目を気にする「恥の文化」となるということだ。そしてこの「恥の文化」こそが前節で述べた「ふさわしい位置」という概念や「集団主義」という特徴を支えてもいるという。

以上、ベネディクトが唱えた「集団主義」と「恥の文化」という 2 つの「日本文化論」を見て分かるのは、それが強引なエピソード主義によって成立しているという点だ。「集団主義」は江戸時代の階層制度という制度上の一つの特徴を都合よく広げて「日本文化」として一般化したものであるし、「恥の文化」は「恩」という一つ概念を「日本社会」全体の特徴として捉えた結果である。こうしたエピソード主義の背景には、この本の研究が 1944 年 6 月に米戦時情報局から敵国日本を「理解」するために委託されたものであったという事実がある【青木 1990: 32】。つまり、この本の研究の目的は、アメリカが未知なる日本について、その全体像を国家レベルで把握することであり、その結果、それぞれのエピソードがどのような集団におけるものなのか、どのような状況でのものなのかといった詳細なコンテクストが分析されることなく、「日本」という国家レベルにまで一般化されたのである。また、その際アメリカとの相違点が必然的に強調されることとなる。このような特徴は、同質的であると同時に他と比べて特異な「日本文化」があると信じている点で、ある種の「日本人性」の幻想であるとも言える。したがって、ベネディクトの『菊と刀』には、強引なエピソード主義に加え、背後にある「日本人性」の幻想という問題点も内包されていることが分かる。

このような事実が意味するのは、「日本文化論」という概念が、その始まりのときから現

在にも通じる問題点を孕んでいたということである。前章で指摘した「日本文化論」の問題点は、近年突然生じたものではなく、「日本文化論」という概念の誕生のときから脈々と受け継がれたものなのだ。実際、「日本文化論」として 1960 年代に多く読まれた中根千枝の『タテ社会の人間関係』も、70 年代にブームとなった土居健郎の『「甘え」の構造』も、同様の問題点を孕んでいる。中根は「日本社会」がインドと比べて「場」を重視するという一つのエピソードを「場の社会」や「タテ社会」という「日本文化論」にまで発展させているし、土居は自らが想起した「甘え」という概念に関係あるさまざまなエピソードを都合よく抜き出すことで、「甘え」を「日本文化論」に仕立て上げた。二人とも、同質的かつ他文化と比して特異な「日本文化」があるという前提に立ち、そのために都合よくエピソードを抜き出し「日本文化論」を作り上げたのである。もちろん、そうした「日本文化論」を真っ向から否定するつもりはない。しかし、どのような「日本文化論」でも、それが「日本文化論」という概念である限り、前章で論じたような問題点を孕んでいることをここで強調しておきたい。

第 4 章 「日本文化論」の社会的構築

前章では、「日本文化論」という概念自体が第二章でみたような問題点を内包していることを明らかにした。そこから「日本文化論」へのアプローチの仕方が見えてくる。すなわち、「日本文化論」という概念自体に問題点がある以上、それぞれの「日本文化論」を個別に分析し、どの「日本文化論」が正しく、どの「日本文化論」が間違いなのかという本質探しは意味をなさない。それは「日本文化論」というカテゴリーを強化する恐れがあるだけで、それ自体が孕んでいる問題点の解決にはつながらない。それよりもむしろ、「日本文化論」がいかにか社会的に構築されているかについての分析が必要であろう【松尾：195—196】。それによって「日本文化論」が社会に普及してしまう原因を探ることができ、さらには、そこから「日本文化論」を脱構築していくための糸口を見つけることができるかもしれない。そこで、本章では「日本文化論」がどのように社会的に構築されるのかという視点に立ち、その社会への普及の原因を探っていく。なぜ「日本文化論」が社会普及するのかといった研究はこれまでもなされてきたが、ここではまず、それらの研究を踏まえて吉野がまとめた四つの通説を紹介したい。

通説 1. アイデンティティの危機の救済

日本人論は「西洋化・工業化によって脅威にさらされたナショナル・アイデンティティを再構築する」【吉野 1997：203】ための試みであるとする説。

通説 2. 経済的成功・社会的安定と文化的優越感

「日本人論が強調するタテ社会、甘え、腹芸に代表されるような人間関係や集団志向を

重んじる日本文化の特徴は、日本的組織力の源泉であり、それは経済的成功の原動力であるとともに、犯罪率が低いなど高度に調和のとれた社会を支える文化的下部構造であると説明することによって、日本人の文化的優越感を助長するという説明」【吉野 1997：207—208】。

通説3. 支配イデオロギーとしての日本文化論

「日本人論はイデオロギー操作の一手段で」あり、「日本社会の一見安定的に見える状態は支配イデオロギーによって創出されて」いて、「日本人論はそうしたイデオロギーのひとつである」【吉野 1997：213】とする説。

通説4. 日本文化としてのアイデンティティへのこだわり

日本人論や日本文化論が流行したり、それに日本人が関心を寄せたりすること「それ自体が日本文化の特質であるとする解釈」【吉野 1997：220】。

「日本文化論」が社会に広まる理由として、以上のような四つの通説がこれまで主に論じられてきた。しかし、吉野はこれら四つの通説について、「知識人・文化エリートの活動を説明する視点としては有効性が認められる」としながらも、それ以外の人々の多くは「文化アイデンティティのような抽象的なテーマに積極的な関心を抱かないであろう」【吉野 1997：205—206】と分析し、その上で次のように論じる。

「なぜ日本人論が流行するのか」という質問は、「なぜ知識人は日本人の独自性の体系化にこだわるのか」、「なぜ他の社会集団がそうした知識人の言説に反応するのか」という二つの設問に分けて考える必要がある【吉野 1997：207】

そしてこれまでの「日本文化論」研究において、「日本人論の『生産者』と『消費者』の関心が区別されずに議論されている」【吉野 1997：207】という問題点を指摘し、また、自らの調査から、知識人・文化エリート以外の社会集団は「知識人の『理論』に反応する際に、自分たちの身近な環境に関わる形で『理論』を消費している」【吉野 1997：224】ことを明らかにし、個人が属する身近な集団の重要性を説いた。

本卒論においてもこの吉野の指摘を参考にし、「なぜ社会が知識人の言説に反応するのか」という視点に重きを置いて分析したい。これまでの「日本文化論」研究が「生産者」側の視点に重点を置いており、「消費者」側の視点に欠けていたことは明らかである。実際に、従来の「日本文化論」研究は「日本文化論」を生産した文献に対する考察であることがほとんどで、それが社会において具体的にどのように受け入れられたのかという考察が少ない。それよりも、その知識人や文化エリートが生産した「日本文化論」が、その他の社会集団と具体的にどのように遭遇するのかについての分析が大切であろう。吉野は知識

人・文化エリート以外の社会集団は自分たちの「身近な環境における具体的な問題を理解し解決する」といった実際的な関心から『理論』を消費していた」[吉野 1997 : 224] ことを自らの調査で明らかにした。この点を踏まえて、本卒論では大衆の身近な環境に広く影響をもたらす身近な存在としてのマスメディアの役割に注目したい。次章からはそのマスメディアの検証を行っていく。

第5章 マスメディアの「日本文化論」構築—出版物・新聞—

マスメディアが大衆に大きな影響力を及ぼすのはその膨大な情報量のためだけではない。その膨大な情報を、大衆にわかりやすい平易な言葉で表現し、視聴者へと伝える「文化仲介者」的役割がマスメディアの影響力を支えているのである。この「文化仲介者」という概念はフェザーストーンによって用いられたものであるが[フェザーストーン 1999 : 86]、吉野は『文化ナショナリズムの社会学』の中で、この概念を「日本文化論」やマスメディアに絡めて論じている。吉野は、仕事の中で外国人と接することが多く、海外経験も豊富な企業人に注目した。そして、彼らが「日本文化論」を積極的に論じる姿勢を明らかにし、その「文化仲介者」としての役割を論じた。さらに、新日本製鉄、太陽神戸銀行、三菱商事といった企業の出版物を取り上げながら、それらの出版物が「日本文化論」を平易な言葉でわかりやすく表現することで大衆化し、より広い社会層に消費させるという役割を担っていることを明らかにした[吉野 1997 : 241—256]。すなわち、知識人が生産した「日本文化論」が出版物の「文化仲介者」的役割によって社会に広められているのである。そのような出版物の例は他にもある。代表的なものがスポーツ雑誌だ。現代のスポーツにおける国際試合の重要度は高まっており、オリンピックやサッカーワールドカップ、野球のワールドベースボールクラシックなど、その存在感は非常に強い。そのような環境の中で、「日本の」野球とは何か、「日本の」サッカーとは何かということに関心が持たれ、「日本野球論」、「日本サッカー論」といったものが語られる。このことを証明するのが『Number』768号(12月23日発行)での日本サッカー論特集である。「外国人監督が語る日本サッカー論 ニッポン再考。」と銘打たれ、総勢11人の外国人監督が登場し、「日本サッカー論」が展開される。そしてそれがいずれも「日本文化論」へと発展しているのである。日本代表監督のアルベルト・ザッケローニは日本選手のチームへの帰属意識の強さから、グループを大切にするという「日本文化論」を語り[Number : 18]、鹿島アントラーズ監督のオズワルド・オリベイラは自らの説得作業の成功から、聞く能力の高さという「日本文化論」を語った[Number : 28]。このような「日本文化論」が70ページほど続いているが、いずれも平易な言葉でわかりやすく文章化され、また、スポーツというフィルターを通過することで大衆が受け入れやすくなっている。すなわち、出版物がスポーツに関心を持つ人々に対して、「日本文化論」を発信するという「文化仲介者」的役割を果たしているのである。

このように、出版物が「日本文化論」を大衆に発信していることを明らかにしたが、そ

ここにはある特徴がある。それは「日本文化論」が人々の日常に埋め込まれているという特徴である。人々は自らの実際的な関心に即して出版物を選び、消費する。ある人は異文化との交流について関心を持ち、ある人はスポーツについて関心を持ち、それぞれに関連する出版物を手にする。それは日常的な行為であり、そこに「日本文化論」への意識がなくとも、人々は出版物を通して「日本文化論」を無意識的に受容するのである。そのような日常性がさらに顕著なマスメディアがある。それが次に取り上げる新聞である。新聞は多くの人がほぼ毎日接するものであり、日常生活の中に埋め込まれている。毎朝新聞を手にする行為はほぼ無意識の内に行われ、読み手にとってそれは当たり前の行為となっているのである。この高い日常性は読み手を受身にする。出版物の場合、人々は意識的にそれぞれの出版物を選ぶことが多い。また、読者には書かれている内容について自由に考察する時間が与えられており、「文化仲介者」によって付与された情報を自分の中で咀嚼することができる。それに対して新聞は、毎日新しく発刊され、前日の新聞はほとんど読まれることはない。そのため、情報を考察する時間が出版物に比べると制限されており、読み手は主体性に欠けてしまうのである。確かに新聞には高いジャーナリズム性があり、読者は書かれている記事に対して、出版物に対してよりも、真剣に向き合おうとするとも言えよう。しかし、その高いジャーナリズム性は、読み手の記事に対する信頼にもつながる。この信頼性が記事に対する批判精神を妨げ、逆に読み手を受身的存在にしてしまう恐れもあるのだ。

このように、新聞は「文化仲介者」的役割に加え、日常的行為であり読み手を受身にしがちであるという特徴を持つ。これは「日本文化論」の発信に好条件であり、実際、新聞は「日本文化論」を発信している。朝日新聞に 2010 年、シリーズとして掲載された「21 世紀のサムライ論」はその一つである。これはサッカーを中心とするスポーツ選手を取り上げ、「現代の『サムライ』と呼ばれる彼らの視点や発想を足がかりに、『日本』と『日本人』を探ろう。」【朝日新聞 2010 年 1 月 1 日 30 面】というまさに「日本文化論」であった。1 月 1 日に掲載されたシリーズ最初の記事では、サッカー日本代表で、海外チームに所属する本田圭佑が取り上げられている。その中で、本田が個人主義や成果主義を求めて海外に渡ることを記述しながら、同時に日本社会が一様に集団主義で平等主義であるような印象が植え付けられる。また、本田圭佑という日本人が、従来の「日本文化論」と異なる個人主義的な価値観を持つことには触れているものの、その本田は「日本社会」に適応せず海外に渡ったことが強調される。したがって、本田のような日本人は例外的であり「日本社会」にはいられない存在という印象が生じ、同時に「日本社会」内部の多様性が隠されてしまっている。これはまさに「日本人性」の幻想がもたらすものであり、「日本文化論」が「日本人性」と強く結びついていることを想起させる。

また、スポーツ以外の分野でも、著名人によって直接「日本文化論」が語られることがある。朝日新聞 2010 年 8 月 25 日 15 面ではマンガ家の倉田真由美が賭博をテーマに意見しているが、その中で、日本人の厳罰好きな理由を尋ねる質問に対し、日本人はこわがり

の遺伝子を持っているとか、危険を冒してリスクをとりに行くより安全・安心を求めたがる国民性があるなどといった「日本文化論」をさりげなく語っている。同新聞 2010 年 12 月 1 日 25 面では、「クール・ジャパンは本物か」と銘打たれ、ジャーナリストの蟹瀬誠一と作家・演出家の鴻上尚史の対談が掲載されている。紙面には「日本が世界に誇れるベスト 5」や「日本が世界に恥ずかしいワースト 5」ランキングが載せられ、掲載された対談の中で「日本文化論」が語られている。

以上では、出版物や新聞が「文化仲介者」的役割を果たして、「日本文化論」を社会に発信していることを明らかにした。そして、その際用いられる手法はやはり強引なエピソード主義である。あるときは外国人監督の選手のチームへの帰属意識の高さから、またあるときは賭博に対する厳しい姿勢から、「日本文化論」が論じられていた。このような強引なエピソード主義は、出版物や新聞といったマスメディアでも行われるが、さらにその傾向が強いのがテレビである。余暇活動として日常に埋め込まれているテレビは、娯楽としての側面が強くなっており、また、民放各局は広告収入に頼っている。そのため、一つ一つの情報や論理の正当性よりも、わかりやすさや面白さが重視されがちである。この特徴は今に始まったことではなく、すでにわかりやすくて面白いのがテレビだという考え方が社会に浸透している。そのような考え方がなされるテレビという舞台においては、強引なエピソード主義も当然のこととみなされる。この環境は「日本文化論」にはうってつけである。第二章で、「日本人性」という強固な幻想が強引なエピソード主義を可能にしていると論じたが、その強固な幻想に加えて、テレビという舞台が設定されてしまうと、「日本文化論」は確固とした安定を獲得することになる。次章では、そのテレビの分析を行っていく。

第 6 章 マスメディアの「日本文化論」構築—テレビ—

ここからは実際テレビという舞台において、「日本文化論」がどのように発信されているのかを分析していく。

はじめに取り上げるのは、NHK が火曜日午後 10 時 55 分から 30 分間放送している『爆笑問題のニッポンの教養』という番組である。この番組はタレントの爆笑問題の二人が、最前線の学者とトークを繰り広げるというものだが、その中でしばしば「日本文化論」が語られる。ここではこの番組の三回分の放送を分析していきたい。

まずは 12 月 14 日の放送を見ていきたい。このとき出演したのは爆笑問題の太田光と田中裕二の二人と日本史学者の磯田道史である。「江戸時代の Twitter」と題されたこの放送の冒頭で、磯田が次のように語る。

ひょっとしたら棄てられちゃうかもしれない、武士の家計簿のようなものから、日本人とは何か（中略）ということを探り取ることができる。古文書は今を生き抜く知恵の海。

この「日本人とは何か」というコメントによって、視聴者に「日本文化論」を受け入れる準備をさせた上で番組が始まるのである。その後、出演者の三人が古文書を見ながらトークを繰り広げるわけだが、その際トークの中に巧みに「日本文化論」が埋め込まれている。例えば、磯田が江戸時代の武士がつけていた、家計簿のような古文書を取り出し、その几帳面さを説明するが、それに対して太田が「日本人の細かさ。これやっぱり日本の役人の優秀なのがあるね」と発言する。すなわち、江戸時代の一部の武士のエピソードを強引に一般化して、「日本文化論」に仕立て上げているのである。このような語りはさらに続く。以下に太田と磯田の会話を引用する。

太田：これ（几帳面に記録された古文書）外国と比べてやっぱり特殊ですか。

磯田：特殊でしょうね。まずね、一般庶民にいたるまで相当数の古文書が残ってるってのは稀有なこと。前近代の社会でこんなに記録がある社会はない。

太田：一方で、アメリカの国立図書館みたいな膨大な資料に比べると、日本は資料が少ない。

磯田：公的資料としての公の機関がきちんと残して公開するという事は遅れている。ところが個人のレベルで生産して私文書として家に貯蔵して物持ち良く取っておくのは世界レベルなんです。

この会話からは「日本人性」の幻想に固執する姿勢も読み取れる。江戸時代の古文書の多さから、「日本」が世界の中で特異な存在であることまで示唆される。確かに、太田が日本の資料の少なさを指摘し反例を示すが、それすらも「日本」の特徴であるとして「日本文化論」を頑なに語ろうとする様子は、まさに「日本人性」の幻想の現れと言えよう。このような会話を通して、「日本」が同質的な社会であり、なおかつ世界でも特異な不思議な国という印象が番組全体に広がっているのである。

そのような特徴は、この回の放送だけのものではない。次に見る11月23日・30日の二週にまたがって放送されたこの番組にも「日本文化論」が登場する。「中国入門」と題された今回の放送では、爆笑問題の2人に加えて5人の日中両国の人間が中国についての会話を繰り広げる。その中で、中国には「中華料理」という言葉がないのに対して、日本には「日本料理」や「和食」という言葉があることに会話が及び、以下のようなトークが太田と政治学者の天児慧の間で交わされる。

太田：（日本人が）自分の（国の料理の）こと「和食」っていうのは引き離す、他人事な精神。（中国に）「中華料理」って言葉がないのは中国人がいかにも毅然としていて、自己中心的ってギャップにつながる。

天児：日本人は外のものをすぐ取り入れちゃう。混ぜてミックスして、それで新しいものを作っていくところがあって、何が本当の日本料理かわからなくなっちゃう。だから「和食」（という言葉が存在する）。

このように「日本料理」や「和食」という言葉から、「日本人」は控えめで、異文化を吸収するといった「日本文化論」が語られている。また、30日の放送の冒頭では日本に観光に来た中国人の人々に「日本人のイメージ」についてインタビューする映像が流れる。そこで、「親切」「まじめで礼儀正しい」「ルールどおりにやりすぎる」といった「日本文化論」が中国人観光客によって語られる。出演者にも同様の質問がなされ、実業家の宋文洲は「決断が遅い。」と回答する。このように、番組のあちらこちらに「日本文化論」が埋め込まれているのである。さらに、「中国人の表と裏、本音はどこにある？」というテロップの後に交わされた、以下の中国政治に関する会話からは「日本人性」の幻想に固執する姿勢もうかがえる。

天児：（中国の政治は）「虚」という感じ。目に見えない実体。虚務会（経済などの実務と切り離して理論・思想・政治を検討する会議）がある。

太田：本音と建前みたいな？

天児：本音と建前とはちょっと違うんですね、日本の政治家は虚を演じられる人はあまりいない。

天児が「中国文化」を「虚」と表現したのに対し、太田が本音と建前という「日本文化論」としてよく言われるフレーズとの類似性を指摘する。しかし、天児がしっかりした根拠を示すことなく、それをバツサリと切り捨ててしまう。この強引に「日本文化」を特異なものとして仕立て上げる様子からは、「日本人性」の幻想に固執する姿勢を見て取ることができる。

次に取り上げるのは、11月30日火曜日に午後7時から放送された『カスペ！イマだ！知りたい最前線 みんなの教科SHOW』である。

この番組は、視聴者が知りたいであろう情報をまとめて発信するという、情報系バラエティ番組であるが、その中に「中国の本当の姿とは？」と題し、中国人との正しい付き合い方を模索するコーナーがある。そこで、タレントがアンコール遺跡群に行って中国人の国民性を探るVTRが流される。アンコール遺跡群は1990年代から先進国による修復作業が行われ、遺跡修復のオリンピックと紹介され、修復された遺跡を見ればそれぞれのお国柄が見えてくるという。そこでまず紹介されたのは日本チームの遺跡である。日本チームは修復を遺跡の中に控えめに施し、違和感を可能な限り少なくする方法を採用していることが、実際の遺跡の映像を流しながら紹介される。これは視聴者に、「日本」は「控えめ

で丁寧な」国であるという「日本文化論」を植え付ける。確かに日本チームの遺跡修復作業が紹介される際に、その修復作業の特徴が「日本社会」の特徴であると直接言及されてはいない。しかし、この映像が流れる前に、「修復された遺跡を見ればそれぞれのお国柄が見えてくる」とアピールされるために、視聴者は無意識的に「日本人」が控えめで丁寧な「日本文化」を持っていると植え付けられるのである。そして、この「控えめで丁寧な」日本チームの修復作業を紹介したすぐ後に、中国チームの遺跡修復が紹介される。その際、中国チームの修復した遺跡が遠巻きに映された時点で、タレントが「日本のものとは違うような気がしますよ」とコメントし、視聴者に中国と日本の差異を訴える。そうして視聴者に中国と日本との差異に目が行くよう準備させた後で、中国チームの修復作業の「雑な」面を映しだし、日本チームの「丁寧さ」と対比させるのである。その後で、「われわれ日本人からみれば首を傾げるような修復が行われています」というナレーションが入る。このナレーションには、「われわれ」としての「日本人」と、「彼ら」としての「中国人」というまなざしが設定されており、そこに「日本人性」の幻想を見ることができよう。このように、そもそも中国人の国民性を知ろうとするコーナーであるのに、巧妙に「日本文化論」が埋め込まれており、同時に「日本人性」の幻想を観察することができる。

さらに、アンコール遺跡群に観光に来ていたオーストラリア人とアメリカ人にインタビューが行われ、彼らが中国チームの遺跡に悪い評価をくだす。それに対して現地の警備員は中国チームの仕事の速さに高評価をくだす。この何気ない外国人へのインタビューによって、中国はカンボジアの「遅れた」国民には好意的に受け止められることがあっても、オーストラリア・アメリカといった「進んだ」国民には認められないという印象を視聴者に与える。そして、中国と対照的に映し出された日本は、「進んだ」国民であることが暗に示唆されるのである。

そのような「先進国家」としての「日本」は、次に取り上げるのは12月14日火曜日午後7時から放送された『教えて Mr.ニュース そうなんだニッポン』でも強調されている。

この番組でもまた、「5つのニュースで分かる中国とうまく付き合う方法とは？」と題し、中国の人との付き合い方を模索するコーナーがあるのだが、その5つのニュースの一つに「上海万博PRソング盗作疑惑」が取り上げられた。このニュースにたたみかけるように、3年前の石景山遊樂園におけるキャラクターの「パクリ」がVTRで流され、司会の池上彰が中国には「ニセモノ文化」があると語る。さらに、アメリカの雑誌タイムが発表した中国の「パクリ」商品ランキングや、日本の税関での偽ブランド品差し止め件数ランキング（1位中国18893件、2位韓国1480件、3位香港458件：2009年財務省調べ）が映し出される。こうして中国の「ニセモノ文化」を強調した後で、池上が次のように語る。

実はあんまり人のことも言えないんですよ。第一次世界大戦のころまだ日本がとっても貧しかった頃はですね、日本がずいぶんニセモノコピー商品を作って、メイドイン

ジャパンっていうのは安かろう悪かろうの代名詞だった時代もあるんですよ。第二次世界大戦後そのメイドインジャパンの評判を何とか回復するためにたいへんな苦勞があった。今でこそメイドインジャパンっていうのは本当に高品質、良い物っていう代名詞になってますが、昔はそうでなかった。

このコメントは、「中国」が「遅れた」国家であり、「日本」が「進んだ」国家であるという印象を視聴者に植え付ける。また、それまで中国の「ニセモノ文化」を面白おかしく茶化していたスタジオの「日本人」の面々は、この池上のコメントの際、急に真面目な表情となり笑いがなくなる。ここから、「中国」のことなら笑って茶化せる「他人事」であるが、「日本」のこととなると「我が事」となっていることが読み取れる。以上のような流れによって、「われわれ」としての「日本」は「進んだ」国家であるという「日本文化論」が発信されているのである。

第7章 マスメディアの「日本文化論」脱構築

第5章以降、出版物や新聞、テレビの分析を通して、マスメディアによる「日本文化論」の発信を明らかにしてきた。それによって、マスメディアが「日本文化論」の社会的構築に一方的に加担しているようにも思える。しかし、それは一側面的な見方にすぎず、実は、マスメディアには「日本文化論」を構築する側面だけではなく、反対に「日本文化論」を脱構築する側面もある。本章では、そのマスメディアによる「日本文化論」の脱構築を、これまで取り上げてきた出版物や新聞、テレビを別の視点から再分析しながら見ていく。

まずは出版物である。ここでは第5章でも取り上げた『Number』768号（12月23日発行）を再度分析する。第5章では「日本文化論」を語る存在として取り上げたオズワルド・オリベイラは実は次のようにもコメントしている。

日本人をひと括りにして語ることはナンセンスだろう。生まれた場所や育った環境、性格などが違うのだから [Number 768 : 28]。

また、元サッカー日本代表監督のイビチャ・オシムも以下のようにコメントする。

日本人がヨーロッパ人と比べてまったく異なっているわけでもなければ、中国人や韓国人ともものすごく大きな違いがあるわけでもないだろう。違いを知ることは大事だが、仕事をするうえではどの国にも当てはまる共通則、普遍則も同じように大事だ [Number 768 : 44]。

さらには、「日本人論を考える」と題されたコラムの中で、「日本人論」を否定的に捉えな

がら、最後に以下のようにそのコラムがまとめられている。

上っ面で信じたら役に立たない。疑ってかかるくらいがちょうどいい。日本人論とはそういうものだ [Number 768 : 51]。

以上で引用した三つの文章は、「日本文化論」を構築するようなものではない。むしろ、「日本文化論」という概念自体に疑問を投げかけ、「日本文化論」という概念を脱構築するものであると言える。

この「日本文化論」の脱構築は新聞においても見られる。第 5 章でも見た朝日新聞「21 世紀のサムライ論」シリーズにおける、2010 年 5 月 22 日スポーツ面掲載の記事の中で、2016 年東京五輪招致委員会事務総長であった河野一郎の以下のコメントが紹介されている。

「日本人の良さ」は、必ずしも国際比較による客観的な事実を指していない。「良さ」を語る日本人自身が、どう見られたいかを表明しているに過ぎない。それを自覚しておくべきだ。

さらに、テレビに関しても「日本文化論」の脱構築が行われていた。『爆笑問題のニッポンの教養』の 11 月 30 日の放送において、中国出身ながら日本でも活躍する宋に対して、アイデンティティ意識についての質問が飛ぶ。それに対して宋は「僕は自分。国によってアイデンティティなんて絶対嘘。」と答える。さらに、別の出演者は「アイデンティティとか国を超えて、みな同じ人間というところが見えると受け入れやすい。」と発言する。これは「日本文化論」の「日本社会」を同質的で、他の社会とは異なる特別なものとみなす考え方を否定するものである。また、番組の最後には、「日本文化論」や「中国文化論」といったイメージが異文化との交流の役に立つ面を認めた上で、太田が次のようにコメントする。

でもそのときに「イメージが絶対邪魔するんだ」ということを意識しつつそれをやってことだと思う。マスコミがパッとやった一つの事件で、わっとイメージが広がっちゃうから、情報がこれだけ世界に行き届いているってことは、ある種、知りやすいけど知りにくいっていう状態だと思う。邪魔をされやすいから。

すなわち、太田は「日本文化論」によって形成されたイメージを、それはあくまでイメージであると強調し、それが全てではないことを論じている。これは「日本文化論」に固執する姿勢への否定でもあり、それは「日本文化論」の脱構築にもつながる。そして最後に、「イメージに飲まれるな」という文句でこの番組は締められるのである。

また、同じく 11 月 30 日に放送された『カスペ！イマだ！知りたい最前線 みんなの教

科 SHOW』においても、同様の特徴が見られる。この番組では第 6 章で明らかにしたように、アンコール遺跡群の修復作業を日本や中国の国民性を強引に結び付けていたが、その後、中国で活躍する日本人俳優の矢野浩二が登場し、次のように語る。

一つの枠にはめるな。あんたは日本人だからこうだ、あんたは中国人だからこうだっていうのは言えないんです。いろんな報道とかで印象が固定化される訳じゃないですか。それだけに右往左往するんじゃないかと、個人個人の中国の人を見ていくことが大事なんじゃないか。

そして、中国の人とうまく付き合うための極意として「ひとつの枠にはめるな！個人を見る！」という文句で VTR が締められる。第 6 章で見たような「日本文化論」の構築の一方で、以上のようにテレビも「日本文化論」を脱構築する側面を内包しているのである。

以上のように、マスメディアには「日本文化論」を脱構築するような側面もあることが明らかになった。確かに、マスメディアは第 5 章で触れたように、ステレオタイプを生じさせやすい環境にあり、「日本文化論」を脱構築する側面は機能しづらいかもしれない。実際、多くの場合、編集によってそのような側面は覆い隠されてしまっている。しかしそれでもマスメディアのこの「日本文化論」を脱構築する側面にここで触れたのは、ここに日本社会が「日本文化論」から脱却するための糸口があるのではないかと考えるからだ。いつまでも、マスメディアが「日本文化論」のようなステレオタイプを生み出すものであるという言説に甘んじてはいけぬ。そのような姿勢は批判精神の欠如を招き、疑問や違和感をますます抱きにくくさせる。そうではなく、そのような「マスメディアはステレオタイプ化する」というステレオタイプに縛られないという発想が、「日本文化論」からの脱却にもつながるのではないだろうか。その点を含めて、次章で本卒論のまとめとしたい。

第 8 章 結論

日常の中でさりげなく語られる「日本文化論」。それはほぼ無意識的に発せられる。しかし、その無意識的な「日本文化論」にはいくつかの問題点があった。なかでも重要なのは、それが「日本人性」の幻想と強く結びついていることである。この「日本人性」の幻想は、文化本質主義的なまなざしへとつながり、それが社会に文化的な不平等をもたらす。つまり、「日本文化論」という無意識的な一般化が、文化的な不平等というナショナリスティックな事実とまでつながるのである。これは言い換えると、社会が非日常へと追いやってきたナショナリズムが、「日本文化論」という仮面をかぶって日常に忍び込んでいるということでもある。この、一方でナショナリズムを否定し、一方で「日本文化論」を語る現在の日本社会は、極めて矛盾した状態にあると言えよう。

そして、そのような矛盾を可能にしているのがマスメディアである。マスメディアには平易な言葉で大衆にわかりやすく情報を伝えるという「文化仲介者」的役割があり、それが強引なエピソード主義に頼る「日本文化論」と相性がよかったのである。さらにテレビに関して言えば、わかりやすさや面白さが重要視され、強引なエピソード主義も当然の環境である。そのため、「日本文化論」にとっては非常に良い環境であり、実際、出版物や新聞に比べてより強引な一般化が行われており、「日本文化論」の社会的構築に貢献していた。

ではどうすればこのような「日本文化論」から脱却することができるのだろうか。その糸口もまた、マスメディアにある。第7章で分析したように、マスメディアには「日本文化論」を構築するだけでなく、脱構築するような側面もあった。確かにその「日本文化論」を脱構築する側面が有効に機能しているとは言えないが、重要なのはそのような側面があるという事実である。また、そのような事実に気づくためには、マスメディアのイメージに縛られてはいけないということも重要である。「マスメディアが「日本文化論」を構築している」というイメージに惑わされていると、イメージに反する情報に対して気づけなくなってしまう。あらゆる情報に対して意識的になることが大切なのである。

「日本文化論」についても同じことが言えよう。私たちはそれぞれ「日本人とは」、「日本文化とは」、というイメージを多かれ少なかれ持っている。しかし、そのイメージと合致しない事例が、必ず存在するのである。そのことに気づけないままだと、他者や他文化を排除することになり、文化本質主義に陥ることになる。もちろん、「日本文化論」が役に立つ場合もあるだろう。異文化交流の際に「日本文化論」が会話を盛り上げてくれることもあるだろうし、外国の人が「日本文化論」をきっかけに日本に関心を持ってくれるかもしれない。ただその「日本文化論」を語るときに、イメージに縛られてはいけないということであり、太田の言葉を借りれば「イメージに邪魔されるんだ」という認識を忘れないようにしなければならない。このような認識を持つてはじめて、「日本文化論」が多くの多様性を排除していることに気づく準備が整ったと言えよう。そして、それが結局のところ「日本文化論」という概念の脱構築をもたらし、さらには「日本人性」の幻想や文化本質主義的なまなざしからの脱却へとつながっていく。イメージに飲まれないように意識し、一つ一つの事例に目を開くことができれば、その先にある多文化共生社会が自ずと近づいてくるはずである。

[参考文献]

- 青木保、1990、『「日本文化論」の変容』、中央公論者
- 小熊英二、1995、『単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜』、新曜社
- 塩原良和、2010、『変革する多文化主義へ—オーストラリアからの展望』、法政大学出版局
- 杉本良夫、1990、『日本人をやめる方法』、ほんの木
- 土居健郎、1971、『「甘え」の構造』、弘文堂
- 土居健郎、1993、『注釈「甘え」の構造』、弘文堂
- 中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係』、講談社
- 日本経団連、2004、『外国人受け入れ問題に関する提言』
- 日本経団連、2007、『外国人材受入問題に関する第二次提言』
- 萩原滋、国広陽子編、2004、『テレビと外国イメージ—メディアステレオタイプ研究』、勁草書房
- マイク・フェザーストーン、川崎賢一、小川葉子編著訳、池田緑訳、1999、『消費文化とポストモダニズム』、恒星社厚生閣
- 松尾知明、2010、『問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに』
——渡戸一郎、井沢泰樹編、2010、『多民族化社会・日本—〈多文化共生〉の社会的リアリティを問い直す』、明石書店
- 馬淵仁、2002、『「異文化理解」のディスコース』、京都大学学術出版会
- 馬淵仁、2010、『クリティック—多文化、異文化』、東信堂
- 吉野耕作、1997、『文化ナショナリズムの社会学』、名古屋大学出版会
- ルース・ベネディクト、長谷川松治訳、1997、『定訳—菊と刀—日本文化の型—』、社会思想社

[新聞／雑誌]

- 朝日新聞、2010年1月1日（朝刊）
- 同新聞、同年5月22日（朝刊）
- 同新聞、同年8月25日（朝刊）
- 同新聞、同年12月1日（朝刊）
- Number、768号、12月23日発刊

[テレビ]

- NHK、『爆笑問題のニッポンの教養』、22時55分—23時25分、11月23日、30日、12月14日放送分
- フジテレビ、『カスペ！イマだ！知りたい最前線—みんなの教科SHOW』、19時00分—20時54分、11月30日放送
- フジテレビ、『教えて—Mr.ニュース』、19時00分—20時54分、12月14日放送